**私が見たイギリス人の喧嘩の作法 (1)**

（上田郷友会、2019年1月10日例会　清水健一）

10年ほど前、マンチェスター工科大学に共同研究に行っていた時の思い出です。

9月初めの天気が良い日でした。ビールでも飲み、ゆっくりとくつろごうと3時ごろに仕事を切り上げ、大学近くにあるBBC入り口のバス停で帰りのバスを待っていました。道を挟んで反対側にはOdeon3,4という場末の映画館が閉鎖されたまま放置されており、その入り口はゴミの吹き溜と化し、新聞紙やコップなどが散乱していました。そこは成人映画専門の映画館で、上田で言えば東横のようなものです。その前で、浮浪者風の二人の男が大声を上げ口論していました。その様子が実に興味深かったのです。

二人は利き腕である右腕を背中に回し、自分から先に相手を攻撃しないという意思を明確にしていました。さらに、相手が興奮して殴り掛かってきても逃げられるよう、3mほどの微妙な距離を保ちながら怒鳴りあっていました。興奮して片方が一歩前に出ると、相手は２歩下がる。こんなことを繰り返しながら、ありとあらゆる汚い言葉を投げつけあっていました。

そのうちに、通りかかった人たちが足を止め、喧嘩をしている二人を見つめるようになりました。みんな静かに見つめているだけで、野次馬根性を出し、喧嘩に油を注ぐようなヤジを飛ばす者は一人もいませんでした。この人達の存在が、口喧嘩が暴力沙汰に発展するのを防ぐ大きな抑止力になっていたのです。日本でしたら、もめごとに巻き込まれ、とばっちりでも食ったら大変、要は“さわらぬ神に祟りなし”、と見て見ぬふりをして足早に去っていく人がほとんどではないでしょうか。ところがイギリスでは、そうでない人が結構たくさんいるのです。ここで肝心なことは、見物人という“現場の目撃者“がいることで、二人だけの喧嘩が“衆人環視下での喧嘩”になったという事です。そうなると、喧嘩の発端はどのようなものであれ、“先に手を出したほうが負け”です。二人はこの事を熟知しているので、ますます相手に手が出せなくなります。

こうした“膠着状態”が続くうちに、“相手憎し”で周りが見えなくなっていた二人も周りの人の視線を感じ、ふと我に返ったのかもしれません。あるいは、相手に投げかける汚い言葉も尽き、緊張のあまり疲れ果てたのかもしれません。喧嘩は徐々に尻つぼみになり、二人は適当なところで矛を収め、15分ほど続いた喧嘩は殴り合いにならずに終息しました。

今はやりのtwitterなどではこうはいきません。相手が全く見えませんから。一時の感情にまかせて汚い言葉を不特定多数の人たちに向けて投げつけることでうっ憤を晴らし、あとは知らん顔を決め込む。発信された内容はその間にも独り歩きして人を傷つけていく。実に卑怯ですね。まるで、夜中に薮の中から道を歩いている誰とも知れない通行人に向かって石を投げつけ、石にあたって痛がっている人を見て喜んでいるのと全く変わりません。

最近、政治家などが大衆の“ウケを狙い”、 twitterなどで発信した内容が批判されることが多くなっています。それに対する対応は実にワンパターン。最初は“毅然とした態度”を取って無視を決め込む。無視できなくなると、“表現の自由”などといった言葉を持ち出し、あたかも批判した側に非があるかのような口調で反論する。でも、しょせんは深い考えもなく、思い付きで発言した内容。仕掛けがお粗末。一番大切な、“表現の自由にはそれ相応の責任が伴う”という自覚が完全に欠落。こうした安易な言い訳が通用しなくなり、選挙民の人気が失われる、あるいは所属する政党内での自分の立場が悪くなると見るや一転して、“発言内容を不快に感じられた方がおられたらお詫びする”、あるいは“党にこれ以上迷惑をかけるはけにはいかない”などと、加害者である自分をまるで“被害者”であるかのように装い“謝罪したふり”をして切り抜けようとする。恥ずかしいですね。

そういえば、リクルートによる政治家への株の優先譲渡による利益供与が問題になった事がありました。30年も昔のことです。その時のインタビューで、宮沢喜一副総理・蔵相は記者から政治家のモラルの低さを指摘する質問を受けました。その質問に対して、宮沢さんは“この程度の国民にして、この程度の政府”と返答したことを今でもはっきりと覚えています。でも、宮沢さんのこの発言に対して、国民からの反発は起きなかったと記憶しています。少なくとも表面上は。Twitterなどがある今でしたら状況は異なっていたかもしれません。ネット上などで大きな反発が起き、宮沢さんは謝罪に追い込まれていたのではないでしょうか。それはさておき、実に含蓄の深い言葉だと思われませんか。

**私が見たイギリス人の喧嘩の作法（2）サッチャー首相の場合**

（上田郷友会、2019年2月7日例会　清水健一）

前回お話した浮浪者同士の喧嘩はイギリス社会の成熟度を実感させられるような形で終息し、暴力沙汰に発展することはありませんでした。でも、国同士の対立となるとイギリスでもこうはいきません。1982年の春にイギリスとアルゼンチンの間で勃発したフォークランド戦争はその典型的な例です。

私がマンチェスター工科大学に留学した1979年にサッチャー政権が誕生しました。新自由主義を掲げてさっそうと登場したサッチャー政権は、労働党政権が1960～1970年代にわたって推し進めていた社会福祉の充実と有力企業の国有化政策を“英国病と揶揄されていた経済の低迷をもたらした元凶”と決めつけ全面否定。“小さな政府と、民間でできることは民間で”という、今の日本でよく聞かれるスローガンの下に、労働党政権とは真逆の政策を急激に推進。その結果、首相就任時には290万人に達していた失業者数は350万人まで急増。当然、人々の不満は急激に高まり、新聞などの論調ではサッチャー政権は一期限りという見方が大勢を占めていました。でも、その後の展開は誰もが予想もしなかったものになったのです。

1979年12月24日、クリスマスイブの日、何を考えたかソ連軍が突如としてアフガニスタンに侵攻。西側諸国は予想もしない事態に驚愕。“ドイツを二度と戦場にしない”との強い信念で東西対立の緊張を緩和しようと西ドイツのシュミット首相が長年にわたって推し進めていたデタント政策は一夜にして崩壊。翌、1980年のモスクワオリンピックをアメリカの呼びかけに応じ、日本、韓国、西ドイツなどはボイコット。そうした中で、毅然とした態度でソ連を声高に非難したサッチャー首相に国民は“鉄の女”などといった称号と喝采を送りました。これが大きな追い風になり、サッチャー首相は政権滑り出し当時の苦境をなんとか乗り切ることができました。これがフォークランド戦争前のイギリスの社会状況です。

これに対してアルゼンチンでは、アメリカの経済援助を受けていたヒデラ反共軍事政権に代わりガルチェリ軍事政権が1981年に誕生。しかし、急速に外資を導入したことによる経済破綻とハイパーインフレの進行は止めようもなく、国民の不満は爆発寸前。高まる国民の不満をそらすためにガルチェリ大統領が目を付けたのがイギリスと領有権をめぐって係争関係になったフォークランド諸島です。アルゼンチン沖、500km 程のところにある東西2島と、それらの周りに点在する小さな島々からなり、総面積は日本の四国の半分より少し大きい程度。羊を飼い羊毛を売ることで生計を立てているイギリス人しか住んでいない貧しくとも平和なところです。本国から8,000km以上も離れ、定期航空路もなく、医療や行政もアルゼンチンに頼らなければ立ち行かないような状況。経済的な苦境にあえいでいた本国から見れば、フォークランド諸島は“お荷物”というか、ほとんど“見捨てられた”かのようなところにすぎなかったのです。

ガルチェリ大統領が“この島はアルゼンチンの領土”と発言したのをきっかけに、“民間人の跳ね上がり”が島に上陸。すると、まるでこれに誘発されたかのように、アルゼンチンが軍艦2隻を使って、イギリスの了解もなしに民間人を島に上陸させたのが事の発端です。これを見て熱狂したおびただしい数の民衆が大統領官邸前の広場を埋め尽くし、支持を表明。当然、イギリスはこれに強く抗議。上陸した民間人の即時退去を要求。これに対し、アルゼンチンは4月2日、逆に軍を侵攻させ島を占拠。

この事態を受けて、イギリスでは外相を務めていたキャリントン卿が“アルゼンチンの軍事侵攻を事前に予測できなかった”との理由で“3日後”の4月5日に辞任。キャリントン卿は“紛争を対話により平和的に解決すること”に一生をささげた人で、イギリス外交史上、最高の知性の一人と言われ、大きな信頼と尊敬を集めていた人です。彼が辞任したことで、サッチャー首相の強硬路線に歯止めをかけることができる人はいなくなりました。後任のピム外相は、アルゼンチンに対する最大の支援国家であったアメリカを巻き込みシャトル外交を行い平和的な解決を模索したものの不調に終わり、開戦に至ってしまいました。

開戦と同時にイギリス国内では愛国心のようなものが高まり、ジョン・レノンのイマジンは放送禁止。イギリスは空母二隻を中核とする機動部隊をアルゼンチンに向け進攻させました。BBCテレビの中継で、戦争に向かう兵士たちが船の甲板で上半身裸になり、みんなで楽しそうに話をしながら日光浴をしている姿が放映されました。私にはまるでみんなが休暇を楽しんでいるかのように見えました。彼らも、船が戦闘地域に到達するまでの2週間の間に紛争は話し合いで平和的に解決するだろうと楽観していたと思います。

結局、72日間続いた戦闘はイギリス軍側に256名、アルゼンチン側に645名の戦死者、双方にその倍の負傷者を出した後、6月14日にアルゼンチン軍が降伏したことで終結。敗戦で国民の信を失ったガルチェリ大統領はその2日後に失脚。一方、その翌年にイギリスで行われた総選挙で、サッチャー首相は国民の圧倒的な支持(73%)を受け再選されました。その4年後、3期目がかかった選挙で、サッチャー首相は“医療関係者の給料大幅引き上げ”という、まるで労働党政権もアッと驚くような“大バラマキ政策”を展開。これが見事に功を奏して、3選を勝ち取り、結局、サッチャーさんは12年も長きにわたり首相の座に居座り続けることになりました。

以下は、この戦争についての私の個人的な感想です。

イギリスに滞在し、サッチャー政権誕生時からフォークランド戦争終結まで、3年間にわたってイギリスの社会状況の変化をつぶさに見ていたものとして、 “権力は蜜の味”と言う言葉を今になって噛みしめています。政治家や企業のトップなど、付与される権限が大きければ大きいほど人は権力により強く執着するものです。そのため、人はいったん権力を手にすると、それを守るためであれば“善悪の見境なく”、どのような冷酷で残酷なことも平気でするというおぞましい一面を隠し持っていることは歴史を見れば明白です。

1982年の4月2日にアルゼンチン軍がフォークランド諸島に侵攻した時、サッチャー首相は“千載一遇のチャンス到来”と内心小躍りして喜んだと思います。自身の再選がかかった総選挙が一年後に迫っていたわけですから、これを最大限利用しない手はありません。首相に就任した1979年、急激な改革で失業者が激増。不人気の中であえいでいた時、ソ連のアフガニスタン侵攻があり、それに対して毅然とした対応をとったことで“鉄の女”などと国民から喝采を浴び、それが大きな追い風になって苦境をしのぐことができた時の記憶が彼女の頭の中を駆け巡ったと思います。

サッチャー首相にとって“最高のシナリオ”がどのようなものであったかは明白です。まず、軍事侵攻したアルゼンチンを”無法な侵略者”と決めつけ、 “無法な侵略者とは取引しない”との、だれもが容易に納得できる原則論を持ち出し、毅然とした対応を取る。次に、アメリカや西側諸国を巻き込みアルゼンチンを非難する国際的な包囲網を形成する。最後に、圧倒的な軍事力を背景にして、アルゼンチン軍を徹底的に叩きのめし、自国民が一片の疑問も抱くことのないような“短期的かつ完全な勝利”を実現する。自国の兵士の犠牲を少なくするため、中途半端な停戦に応ずることなど論外だったと思います。事実、4月2日に戦闘が始まり一か月ほど経過した頃、事態を憂慮した中南米諸国連合（OAS）がアメリカに呼び掛け、イギリスとアルゼンチンに即時停戦による和平案を提示していたのです。まさにその真っただ中の5月2日、イギリス海軍はアルゼンチン海軍の精神的な支えでもあった巡洋艦ベルグラーノに魚雷攻撃を行い撃沈しました。この攻撃で、停戦案は水の泡と消え、アルゼンチン兵士323名が犠牲になり、その数はアルゼンチン軍の総死傷者数の半数にも達しました。撃沈されたベルグラーノは1935年にアメリカで建造されたフェニックスという巡洋艦が1951年にアルゼンチンに払い下げられたもので、旧式で実戦上ほとんど役に立たない、いってみれば“張子の虎”のようなものにすぎなかったのです。アルゼンチンの人たちは、ベルグラーノの撃沈はイギリスがアルゼンチン側の死者数を増やし、自軍の死者数を少なく見せかける、つまり“戦況をよく見せる”ために意図的に行ったと固く信じています。

2013年4月7日にサッチャー首相は亡くなりました。各国の元首やなどから彼女の功績をたたえる弔電が次々に届く中、アルゼンチンのキルチネル大統領はただ一人沈黙を守りました。フォークランド戦争の記憶がある年配のアルゼンチンの人たちは“嫌な女がやっと死んだ”、“Go to hell !(地獄へ落ちろ)”と、声に出さないまでも心の中で叫んだと思います。

この戦争で息子を失った母親がBBCテレビのインタビューで述べた言葉が今でも忘れられません。贈られた勲章を前にして、“息子の命に比べれば、この勲章はコカ・コーラの瓶の蓋と何ら変わりがない”と静かにつぶやきました。ずっと悲しみに耐える中で、“遠く離れ、羊の数のほうが人間の数よりもはるかに多い平和な島をめぐって、なぜあのような戦争が起きてしまったのか”を考えていたのではないかともいます。あの戦争で命を落とした兵士たちは何も語ることもできず、ただ忘れ去られていくのみです。そして私たちは、また同じ過ちを繰り返していくのだと思います。何度も何度も。おそらく人類が滅亡する日まで。